

て永原と稱す。慶安二年致仕し、名を如閑と稱し、萬治三年歿す。數子あり。長男左京孝政、父遺知の内五千九百五十石を相續す。三男權太夫孝好、父遺知の内五百五十石配分賜はり、後度々加恩ありて、三千石を拜領す。土佐孝治の妻室は、花山院内大臣定熙公の息女、權太夫孝好の妻室は、六條中納言有和卿の息女なり。白山長吏澄意の筆記に云ふ。永原土佐孝治は、本苗赤座、本國越前、代々今庄の城主たりしが、關ヶ原合戦の後、我が藩へ隨從して來り仕へたり。孝治は花山院内府公の類葉にて、歌道・連歌に長じ、殊に能筆たり。白山にての自詠は、當社再興の以前神拜してよめりとぞ。

於白山社頭

孝 治

神の代のはじめを爰に白山の

やしろに來つゝたのむゆくすゑ

此の社かたへはかたぶきなどしたるに、造立の心ざし

有よし、神主申侍るに。

そのかみの名をあらはして今もまた

宮作りせん三柱の神

發 句
しら山は幾世ゆづりのはつみ雪
月林といふ處にて。

冬は月の林にさはるかけもなし

○才伊豆舊第并傳話

有澤永貞の古兵談殘囊集に、才道仁屋敷は、永原左京上屋敷の地にて、今は揚地に成りたる所と云ふと見ゆ、延寶金澤圖に、出羽一番町と三番町との間なる地をば、永原左京と記載し、前口三十六間一尺とありて、今金澤神社の横向なり。永原氏移轉の後は明地と成り、永原左京揚屋敷と稱し來りしを、寶曆九年八月藤田彈正の居第となり、明治廢藩の後まで藤田氏此の地に居住す。三州志鍵囊餘考に云ふ。才伊豆は初め上杉家の士にて、小田切庄左衛門と云ふ。松川合戦に青木新兵衛杯と武功を顯せり。後に才道仁と號す。我が公より二千石を賜ひ、後四千石に至る。元和五・六年の士帳には、三千石とあり。居第は小立野藤田五郎・横濱主税等の第地と云ふ。其の子監物の時、寛永十六年大聖寺の從士となす。其の子次太夫千五百石と、大聖寺承應二年の

士帳に見ゆ。延寶二年よりの士帳に才和泉あり。是其の族なるべしといへり。平次按ずるに、閑友雜記には、上杉家の家士にて小田切所左衛門と云ふ。後才伊豆と號し加賀の利常に仕へ、後道仁と云ふ。元は徳川家譜代の士にて、小田切加兵衛と云ふ人也。と見ゆ、武道致知書私小鏡には、才伊豆・戸嶋・甘利一黨十六人、一度に甲州より當家へ奉公、其の後戸嶋与甘利二左衛門、公事之節戸嶋勝ちたる故に、伊豆牢人し、加州へ來る。其の節上使酒井左衛門殿也。とあり。當家とは徳川家をいへり。又懷惠夜話には、才伊豆は其の先甲州者にて、小田切大學と云ふ。勝頼滅亡の後渡り奉公をし、暫く御家へも來り、御暇申上ぐる後他國へ行き、法舂して道仁と云ふ。大坂陣の時は御家にあり。といへり。按ずるに、御家とは前田家なり。但し後御暇申上げ他國へ行くと云ふは過聞也。關屋政春古兵談陽卷の有澤武貞朱書に云ふ。才伊豆は初め信州河中嶋の者、高坂彈正組小田切所左衛門と云ひし者也。小幡勘兵衛景憲親の小幡氏、信州海津今の松代城二郭に在りて馴染と云ふ。才は四千石の身代也。景勝に有る時迄は、小田切所左衛門と云ふ

也。加賀へ來る時才伊豆に成り、法舂後は才道仁といふ也。とあり。諸記録に記載すといへども、其の傳説區々にて一ならず。

○皿屋敷

出羽一番町の入口也。延寶金澤圖に、永原左京第地と出羽一番町の入口との間なる地を明地となしたり。是即ち皿屋敷といへる地也。寶曆九年に永原左京揚地を藤田氏邸地と成したる後、彼の明地を藤田氏邸内へ取り込みになし、一圍の邸地とせしかど、皿屋敷といひ傳ふる地は、甚だ低地にて水の流出悪しき地なりといへり。龜尾記に、皿屋敷といひ傳ふれど、其の由來詳かならず。皿屋敷といへる地は、爰のみならず、金澤中に五・六ヶ所もありといへり。按ずるに、右藤田氏邸内へ取り込み相成る皿屋敷は、延寶以前より明地と成りたれば、皿屋敷の故事は甚だ古き事なるべし。此の地明地なりし頃は、荆棘生ひ茂り、殊に濕地にて兒童の昔語りにいへる播州皿屋敷は、此の地ならんかといへり。彼の昔語りの皿屋敷の傳話は、小幡播磨といふ人秘藏せし南京の皿を、下婢あやまつて破壊せしを怒つて殺